

「留学定住移民」の定住過程，ライフリスクと 社会統合（2）

—中国出身移民へのインタビュー調査から—

李 蓮 花

はじめに：定住後の生活

前稿（李 2022）では，日本はすでに様々な民族的，文化的ルーツを持つ人がともに暮らす「移民社会」であること，移民の約半分は一時的な滞在者ではなく今後も日本に定住する可能性の高い人々であること，そして「教育を通じた労働力移動」が日本の定住移民の主要ルートの一つであることを確認した。ふだんあまり知られていない高学歴の留学定住移民の生活実態を明らかにするために，本研究では定住とその後の生活リスクに焦点をあて，首都圏在住の中国出身の留学定住移民に対しインタビュー調査を実施した。前稿での来日の経緯，卒業後のキャリアに続き，本稿では，本調査の主要部分にあたる定住の決定，今まで経験したライフリスクと今後の計画，社会活動について整理する。

本稿の構成は以下のとおりである。まず，第1節では永住または帰化の申請時期や申請理由についてまとめる。第2節から第4節まではライフリスクのうち出産・育児・病気，親の扶養とケア，自分の老後への備えについてそれぞれ詳しく考察する。第5節では仕事と家族以外の社会的ネットワークと社会参加を取り上げ，第6節で今回の調査から得られた主な知見をまとめる。最後に「おわりに」で本研究の意義と限界，課題について触れる。

なお，今回のインフォーマントたちの基本情報は表1のとおりである。

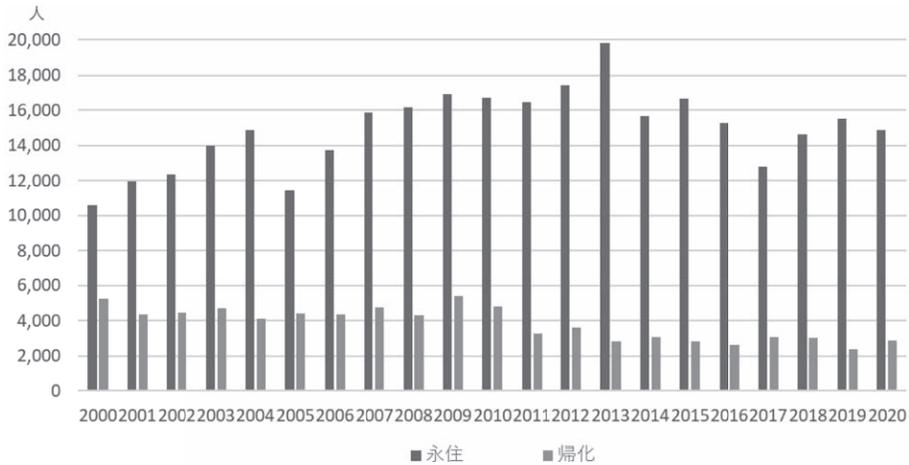
1 在留資格と定住理由

前稿でも述べたように，移住先で長年暮らしているすべての移民が明確な定住意思を持っているとは限らず，様々な理由により「事実上の定住化」が進む場合が多い。在留資格（ビザ）の期限が来るたびに期間更新または資格変更の手続きをすることはかなり面倒であるため，滞り期間が長期化し仕事や生活を安定すると永住権を申請するか日本国籍を取得するのがふつうである。永住権申請には通常10年，帰化には通常5年の滞り期間が必要である¹⁾。永住権取得または帰化後は滞在期間に期限がなくなるだけでなく，日本での活動の制限もなくなる。在日外国人の永住権と帰化の申請件数のピークは2000年代後半であったが，その

表1 インフォーマントの基本情報

	性別	年齢 (調査時)	来日時期	在留資格/ 帰化	最終学歴	職業 (業種)	雇用形態	婚姻状況	家族構成	出身家族 (下線は日本在住)	住居
A	男	50代後半	2001年	帰化	大学院	新聞社記者	正社員	既婚	妻, 子1人 (成人)	姉, 兄2人	マイホーム (一戸建て)
B	男	40代前半	1999年	永住者	学部	会社員 (IT)	正社員	既婚	妻, 子2人 (9, 8歳)	両親, 姉2人	マイホーム (マンション)
C	女	40代後半	1995年	永住者	大学院	通訳 中国語教師	フリーランス	既婚 (夫は日本人)	夫, 子2人 (15, 9歳)	妹	マイホーム (一戸建て)
D	女	40代前半	2000年	永住者の 配偶者	大学院	会社員 (金融)	正社員	既婚	夫, 子1人 (13歳)	両親, 兄	マイホーム (マンション)
E	女	40代前半	2009年	永住者	師範学校 (中国)	個人事業主 (宅配)	個人事業主	既婚 (夫はBさん)	夫, 子2人 (9, 8歳)	両親, 姉	マイホーム (マンション)
F	女	40代前半	2000年	帰化	学部	主婦 (以前は会社員)	—	既婚	夫, 子1人 (4歳)	母, 姉, 兄	マイホーム (マンション)
G	男	30代後半	2008年	高度人材	大学院	会社員 (IT)	正社員	既婚	妻, 子1人 (1歳)	両親	マイホーム (一戸建て)
H	女	40代前半	2002年	永住者	学部	会社員 (貿易)	正社員	未婚	独身	両親, 妹, 弟	マイホーム (マンション)
I	女	40代前半	2003年	永住者	大学院	主婦 (以前はフ リーランス)	—	既婚	夫, 子2人 (15, 3歳)	両親	マイホーム (一戸建て)
J	女	40代後半	2000年	永住者	学部	個人事業主 (英語教室)	個人事業主	既婚	夫, 子1人 (11歳)	父 (再婚), 兄2 人, 姉2人	マイホーム (一戸建て)

図 1 中国出身者の永住許可者数と帰化許可者数の推移



出所：法務省『出入国在留管理』（2018年までは『出入国管理』）各年版、「国籍別帰化者数」（http://www.moj.go.jp/MINJI/toukei_t_minj03.html）のデータより筆者作成。

時は1990年代に定住や興行のビザで来日した日系人やフィリピン人女性が多かった。リーマンショック後そのグループの永住・帰化申請は大幅に減った。一方で、中国出身者の永住・帰化申請は2010年以後も安定的に推移している。図1は2000年以降の中国出身者の永住許可者数と帰化許可者数の推移であるが、帰化より永住を選択する人が多いことが分かる。

1-1 永住か帰化か

永住権を取得した人たちはいつ、どういう思いで申請を決めたのか。現在の家族の在留資格・国籍の状況とあわせて見てみよう。

「私みたいに（日本語学校を入れて）5年間大学に通って、すぐ就職して、同じ会社で働いた人は簡単に永住が取れます。永住権は2009年に取りました。」（Bさん、男性、1999年来日）

「永住申請の条件をクリアした時にすぐ永住を申請しました。」（日本国籍を取得する考えはありますか？）「ないです。まだ両親が中国にいるし… 兄弟が中国にいますが、必要だったら私も手伝わないといけませんので。日本での生活は永住権と帰化でそんなに差がないし。」（Hさん、女性、2002年来日）

（国際結婚ですが日本国籍に変えてないですか？）「変えてません。」「私は急げもので、あまり自ら現状を変えようとしません。国籍を変えないといけないような決定的なきっかけがなかったです。」（Cさん、女性、1995年来日）

「家族3人のビザがバラバラです。」「いつ中国に帰るか分かりませんし。夫は永住、私は

永住者の配偶者、息子は定住です。」「両親がまだ中国にいますので、少なくとも1人は(永住申請を)保留しようかなと。」「中国の政策がごろごろ変わるし、永住をとると不利な点もあると聞いて… まだ分かりません。子どもが留学に行くときは日本国籍にする可能性もあります。中国の国籍だとアメリカで不便な時もありますからね。」(Dさん, 女性, 2000年来日)

(いま国籍は何ですか?)「中国です。永住ビザです。来日10年で永住を申請できるようになってすぐに申請しました。両親がまだ中国にいるので、日本国籍だと帰国のとき不便ですね。心理的な『情結』(思い)もあります。あと、いつか帰国するかもしれない、未知数の部分があるからです。永住は便利ですね。自営業だと帰化した方がいいかもしれませんが。」(Iさん, 女性, 2003年来日)

「夫はだいぶ前に帰化しました。息子も日本国籍で、私は永住です。」(ずっと永住のままでいいですか?日本国籍に変える予定はありますか?)「私は変えようかなと思いますが、夫は反対です。いま特に不便な点もないし、いつか中国に帰ろうとしたとき全員日本国籍だと不便かもって。(中国国籍があると)退職後に中国に帰って暮らせるし。」(Jさん, 女性, 2000年来日)

帰化よりも永住を選ぶ最大の理由として親がまだ母国にいること、日本国籍だと中国での滞在に制限があることが挙げられている。また、永住権があれば日本での生活であまり不便を感じないことも敢えて国籍を変えない理由の1つである。

今回のインタビュー調査では帰化を選択した人も2名いた。

「(会社の)上層部の人は、(中国籍だと)『もしかするとスパイではないか』というリスクもあってなかなか正社員にしてくれない。また、現実問題として取材では突発的なものも多いのですが、一番難しかったのが台湾でした。1ヵ月ぐらいかかった。韓国も。それで2007年に帰化を申請しました。」「私は記者という職業でなかったら帰化しません。私は国籍を変えましたが、家族は中国国籍のままです。昔は帰化しようとするので家族全員一緒に帰化しないといけなかったそうですが、私の時は選択できましたので妻と子どもは帰化せず永住を申請しました。」(Aさん, 男性, 2001年来日)

「(帰化したのは)就職して3年目だったかな。私は自分がやりたいことがありましたが、永住権を取得するには就職してから5年以上必要ですね。その2,3年待つのがとてもしんどかったので帰化を申請しました。」「私も当時急いでなかったら変えてなかったかも。いまは中国に行こうとしても2週間しか滞在できません。中国の滞在ビザを取るのには条件があって大変です。ただ遊びのためではダメです。それでしようがなく2週間で帰ってきます。」「(夫も)結婚する前から日本国籍で、2人とも帰化した後に会って、結婚しまし

た。」(Fさん, 女性, 2000年来日)

また, 2008年に来日したGさんは永住権を申請する条件をクリアしているが, 親の長期滞在などの優遇措置を受けられる「高度人材」の在留資格を選択した。

(いまのビザは?)「私は高度人材2で, 妻は永住(2019年~)です。」(Gさん, 男性, 2008年来日)

このように, 帰化や永住権の申請はナショナル・アイデンティティの側面もあるものの, 主として現実的な便宜を考慮し戦略的に選択する場合が多いこと, 同じ家族のなかでも国籍や在留資格が異なるケースが多いことが今回の調査から浮き彫りになった。

1-2 定住の理由

続いて, 真剣に帰国を考えたことがあったかどうか, なぜ日本に止まることを選んだかの理由である。結婚や就労と違って, 海外留学はふつう一時的なこととして認識され, 留学が終わったら帰国すると考えていた人が多いはずである。

(強く帰国したいと思ったことはなかったですか?)「ありましたね。でも多くはないです。1つは『3.11』の時です。」(結局帰らなかった理由は何ですか?)「うむ… そうですね, 子どもが小さくて, 生活が安定したばかりだったし, その後徐々に恐怖心を克服できましたので。」「日本にきてずっと苦勞して, やっと安定した生活を送れるようになった。結婚して子どももできて, こういう安定した生活を壊したくなかった。私という人は, 良く言えば安定志向, 悪く言えば上昇志向が足りない, 現状に満足するタイプです。(笑)」「私が思うに, 我々は帰国してもあまりアドバンテージがないです。」「つまり, 帰国するかしないかの問題は単純ではなく, 総合的判断で帰国しないことになったと思います。」(Bさん, 男性, 40代前半)

(中国に帰国しようかなと真剣に悩んだ時期はなかったですか?)「今の会社に入社して出張に行ったとき, 30歳前後ですかね, その時は日本にも中国にも基盤がなかったからあまり差がないと思っていました。しかし, 出張で2, 3年中国に通っていたら帰れないと思うようになりました。」(なぜですか?)「中国の変化が速すぎだからです。付いていけないです。」「日本は, すごい上もなければすごい下もなく, 真ん中が多い。」「普通に, 静かに暮らすには日本がいいと思いました。中国に帰ったら上は望めないし, 真ん中もかなり大変じゃないかと思いました。」「学校を卒業してすぐ帰国したらいいかもしれませんが, そのタイミングを逃すとなかなか帰れません。」(Hさん, 女性, 40代前半)

夫婦ともクリスチャンであるIさんは、どこで暮らすかも神様の導きだという。

「我々2人の性格は中国より日本に合っていると思いました。中国で仕事をする则接待とかあって酒も飲まないといけませんし、夫はそういう付き合いがあまり好きではない人です。今の言葉でいうと『社交恐怖症』です。(笑) 自分の世界にいるのが好き。」(信仰は帰国の決定に影響がありますか?) 「あります。キリスト教では神様の導きを重視します。神様は直接どこに行きなさいとは教えませんが、環境や周りの人のアドバイスなどを通して心の平安をくれます。」 「夫は転職しようとしたことがありましたが、うまくいきませんでした。他に、先輩など周りの人からのアドバイスですね。会社がここまで育ててきたから恩返ししないといけないかなという考えもありました。」(Iさん、女性、40代前半)

2 出産・育児と病気

2-1 出産と育児

多くの既婚者にとって出産は人生のなかで最初に経験する大きなライフリスクである。中国人のあいだでは出産後に「坐月子」(産後ケア)をするという習慣があり、実母または義理の母がきて家事を手伝う慣習がある。また、中国では働く女性が多く育児休業制度もないため、幼稚園に入るまでは祖父母が孫の世話をすることが多い。今回の調査でも祖父母が海を渡って日本に手伝にきたり、子どもを一時的に中国の祖父母に預けたりしたケースが多かった。

「長女のときは両方の親が交替で来日し、3歳になるまで手伝ってくれました。」 「私の母と義理の母が6ヵ月ずつ来てくれました。」(Bさん、男性、40代前半)

「上の子が6ヵ月の時に働きはじめました。半年ぐらい働いて一時帰国し、娘はそのまま中国に残り半年ぐらいいました。私は日本に戻って2人目を出産しました。」(Eさん、女性、40代前半)

「私の両親が手伝いにきました。私の両親は農業なので時間が比較的自由です。来日後コロナでビザを何回も延長しました。父は2020年11月に先に一人で帰国し、母は今月末(2021年3月)に帰国する予定です。」(Gさん、男性、30代後半)

「震災の翌年に日本に戻るとき子どもを親に預けてきました。新しい生活が、どう考えても『戦争』になるだろうと思って。ちょうど子どもは中国語を学ぶ年齢で、(中国の)マンションの1階にけっこう良い幼稚園がありました。それで、私の両親が故郷からD市にきて、約10ヵ月間孫の面倒をみました。」(その後、両方のご両親は交替で日本にきた感じですか?) 「そうです。」(Dさん、女性、40代前半)

Jさんは出産のときにお母さんがすでに亡くなっていたが、中国に帰って出産した。

(出産した時は自分で子どもの世話をしましたか?産後ケアも?)「帰国して産んだんです。妊娠7ヵ月で帰国して、中国で出産しました。日本にいても誰も手伝える人がいないので…」(中国では誰が手伝ってくれましたか?)「姉も兄も北京にいますので北京で出産しました。『月嫂』(産後ケア専門の家政婦)と家政婦さんを雇いました。」「最初は兄の家で、その後に姉に家にいました。4ヵ月の時に息子連れて日本に戻ってきました。」(その後はずっと一人で育児をしましたか?)「基本的に一人です。義理の母が日本にきて手伝ってくれたことがあります。夫が予定より早くアメリカに行っちゃって、アメリカに行く前にいろんなことをやらなければならなかったんで、義理の母が来て手伝ってくれました。」(Jさん, 女性, 40代後半)

大学院で学生結婚したIさんも帰国出産を選んだ。

「彼がまだ学生だったので住宅や経済面で厳しく、中国に帰って出産しました。あと、両親を日本に呼ぶには指導教員に保証人を頼まないといけなく、教授の収入などの書類も必要ですが、個人的なことで教授に迷惑をかけたくなかったんで…」「出産して3ヵ月後に私だけ先に日本に戻りました。アルバイトしながら彼が学業を終えるのを支えました。」(息子はいつ日本に来ましたか?)「1歳2ヵ月のときです。」(Iさん, 女性, 40代前半)

このように、出産と育児という大きなライフリスクに対して、多くの在日中国人は国境を越えた親族ネットワークを駆使しながら対応している。しかし、すべての人がこうしたサポートを得られたわけではない。なかには夫婦だけで頑張った人もいる。

(育児を手伝ってくれる人はいましたか?)「長女の時に両親が来て3ヵ月手伝ってくれました。次女の時は両親はすでに亡くなったので、自分で…」「私の仕事は時間が比較的自由で、自分で決めることができたので。できない仕事は断ることができましたし。」(Cさん, 女性, 40代後半)

(子どもが生まれたとき、両家から誰も手伝いにきてないですか?)「誰も来てません。一人で頑張りました。夫がけっこう協力的でした。」「義父は亡くなり、義理の母は膝が悪くて、誰かの世話をできる状況ではなかったです。」「2人とも末子なので両親は年寄りで、頼ろうと思いませんでした。自分で育てた方が一番かなど。」「(日本にいる)姉や兄に子どもが生まれたとき、両親が日本に来ました。母は義理の兄とあまり仲がよくなかったです。私はそれを恐れて…」「私が出産したとき母は行かなきゃと言いましたが、私の方から来ないでと言いました。」(Fさん, 女性, 40代前半)

2-2 家族の病気、死亡

次は本人または家族の病気というリスクについてである。年齢が上がると本人または家族が病気になったり亡くなったりすることもしだいに増える。今回のインフォマントのなかには本人が大きな病気にかかったケースはなかったが、家族の病気がないし死亡を経験した人は何人かいた。このような大きなライフリスクに対し移民たちはどう対応しただろうか。

最年長の A さんは 10 年前に奥さんががんを患い、その時日本の医療保障の充実さを実感したそうだ。

「日本の福祉制度がいいなと思ったのは、その時家内が中国でも治療を受けましたが、中国で発生した医療費も保障してくれました。中国にはこういうのはないですよ。約 10 年前ですが、強く印象に残りました。」「当時は結構大金を使いました。高額療養費制度がありましたので 8 万円以上はかかりませんが、でも 8 万円というのは 1 ヶ月の上限ですね、入院が 2 つの月にまたがったので 16 万円ぐらいかかりました。経済的負担はあまりなかったです。」

奥さんの病気を機に A さん夫婦は奥さんが経営していた都内の小さな飲食店をたたみ、郊外でのんびり過ごせるところを探しはじめた。そして数年間の週末郊外生活を経て、2020 年に完全に郊外に住居を移した。

「我々は 2 人とも農業が好きで、東京にいた時も農地を借りて農業をしました。年を取ってきたので、郊外の広くて空気も良いところに行って、家内が体調を崩してから、畑仕事をしたりすぐ登山ができる方がいいかなど。」(A さん、男性、50 代後半)

また、3 人姉妹の長女である C さんは数年のあいだに両親と妹を病気で相次いで亡くすという悲しい経験をした。もう一人の妹が北京で大学教員をしていたので、両親は地方から北京に行って治療を受けた。

(入院のときは誰が面倒をみました?) 「おば(母の姉妹)たちです。みんな定年退職したので。」(みなさんは北京に住んでいましたか?) 「いいえ、(東北地域の) H 市から北京に行ったんです。私たちにとってはそのことが一番ありがたかったです。母にとっては看病人より自分の妹の方が安心できるし、精神的な交流もできますし。」

「妹も日本にきて留学して、就職し、順風満帆でしたが、突然がんになって、分かった時はすでに末期でした。(涙) … 両親が亡くなった後だったことが幸いでした。」「その時も北京にいる妹と相談しながら対応し、そのために妹は 4~5 回日本にきました。」

子どもは一人でもいいと考えていた C さんは両親の死のあと 2 人目を産むことを決めた。

「両親が病気になって、姉妹で相談したり一緒に苦しい時期を過ごす、特に一緒に親の死を経験して… その時、夫は私のことを心配はしてくれますが、親の死に対し同じ気持ちに

は絶対なれないことを痛感しました。」「小さいときの記憶、会話は同じ家庭で育った姉妹でないと共有できない。」(Cさん, 女性, 40代後半)

Fさんは30代でお父さんをごんで亡くしたが、幸い臨終に立ち会うことはできた。

「父は昔から肝臓が悪く、肝硬変からがんになりました。13年前に兄の上の子が生まれるとき両親が来日していたんですが、その時血を吐いて入院、手術をしました。帰国後は主に母が自宅で看病し、最後の数日だけ入院し、病院で亡くなりました。」「お医者さんからあと2、3日と言われて、母が我々に連絡しました。それで急いで翌日の航空券を買って帰国しました。父はもう意識はありませんでした… 兄は帰化したばかりでまだパスポートを持ってなかったので、帰るまで何日かかりました。父はもう意識もなく、呼吸もどんどん苦しくなりましたが、兄たちが到着するのを待っていたようで、到着して30分後に亡くなりました。人間の意識ってすごいなとその時思いました。(涙)」(Fさん, 女性, 40代前半)

3 親の扶養とケア²⁾

留学当初は40、50代だった親たちも歳月が経つにつれ60、70代になり、病気や介護の心配が増える。日本で親を介護したり看取ることが難しいなか、「孝」の文化のなかで育った移民一世たちは母国にいる老親の扶養、ケアについてどのように考えているのか。また、実際にケアが必要になった時はどのように対応したのか。

3-1 経済的支援

まず、両親に定期的に仕送りをしているかどうかを訊ねた。

(定期的に仕送りしていますか?) 「お正月とかお誕生日とかに少し送金しますが、生活費の支援は、いまはやっていません。」(Dさん, 女性, 40代前半)

「定期的にはしていません。我々の生活もありますから、向こうでお金が必要になったときに助けようと思います。両親たちも少し貯金があります。以前あげようとしたら『要らない』と言われました。」「親がまだ元気な時は旅行の費用を一部出してあげたいですが、それも要らないそうです。なので、将来的に本当にお金が必要になった時に助けてあげたいと思います。毎年いくらというのはしてないです。」(Eさん, 女性, 40代前半)

「(仕送りは) あまりしてないです。結婚する前は少し仕送りしましたが、結婚して自分の生活で精一杯で、逆にお金が必要な時は母から借ります。」(Fさん, 女性, 40代前半)

「(仕送りは) してないです。その必要がありません。」(Gさん, 男性, 30代後半)

「父は年金があるし、再婚した方も元々小学校の先生だったので、経済的にも心配要りま

「留学定住移民」の定住過程, ライフリスクと社会統合 (2)

せん。我々はお正月など時々お金を送ります。一番上の兄は毎月 3000 元ぐらい仕送りしています。近くで面倒をみていないので… 長男の責任感かな。」(J さん, 女性, 40 代後半)

中国では都市住民の場合, 公的年金制度や医療保障制度が比較的早く整備されたため, 高齢者の経済的不安はそれほど大きくない。一方, 農村住民の場合は年金額が低く経済的支援が必要な人もいる。

「(親の年金は) ほとんどないです。」(ご兄弟で生活費を分担していますか?) 「弟は近くで面倒を見ているので, 経済的には私が面倒を見ている方です。私はいざという時に近くについてあげられないので, 経済面で補償している感じです。」(H さん, 女性, 40 代前半)

3-2 精神的／身体的ケア

次は非金銭的なケアについてである。親を日本に呼び一緒に暮らすのも親孝行の 1 つであるが, 多くの高齢者にとって言葉の通じない異国での生活よりは住み慣れた故郷で今までと同じく暮らす方がストレスが少ない。

「大学 1 年生の時に母がきましたが, 1 週間で帰国しました。その時私は大学通っていて, アルバイトもあるので, 週末しか一緒にいる時間がありませんでした。そしたら, 『ここにずっといるとうつ病になるから帰る』って。」(H さん, 女性, 40 代前半)

「去年はコロナでどこにも出かけられなくて大変でした。近所の散歩もできず, スーパーも私一人だけ行ってたので, うちの両親は狭いマンションにずっと閉じ込められていました。母は腰が少し弱くてたくさん歩けないから, 家にもそんなにストレスたまりませんが, 父はもう我慢できなくなって…」(G さん, 男性, 30 代後半)

「以前, 義理の両親がいらっしゃったときに (いざという時のことを) 話したことがあります。やはり日本での生活は寂しい, 友達がいない。日本は確かに医療の面ではいいですが, 自分が暮らし慣れているところではないし… 言葉が通じないので不便というのも大きいですね。義理の父は現役の時にも日本にきたことがありますし, いろんなところに出かけるのが好きですが, 長期の生活となるとやはり中国の方が良いと。自分の生活圈, 生活のスタイルがありますから。例えば『冬泳』(注: 冬に湖や川など室外で泳ぐこと) とか。(笑)」(I さん, 女性, 40 代前半)

比較的元気で, 孫の世話や親の介護の負担がない高齢者たちは母国で自由に, 生き生きと暮らしている。

「母は姑の介護もして最後まで見送ったし… 今は孫の世話もしないので, 友達と旅行に

行ったりして、けっこう羨ましいです。経済自由、時間自由、体力自由がそろって。SNSは毎日お花だったり登山だったり、娘としてうれしいです。」(Iさん, 女性, 40代前半)

「(お母さんは) 元気です。ダンスもやって、いろんな活動しています。体調が悪くなるのが心配ですが、大体の病気はなんとか自分で対応しているようです。」「母は老人ホームには入らないって。いまは元気で、毎日ダンスもして、テレビにも出てます。」「うちはその面(注: 介護のこと)ではあまり心配しないです。いまは元気で動いているので。」(Fさん, 女性, 40代前半)

(お父さんは今年おいくつですか?) 「88歳です。元気です。(再婚して) 子どもと同居しないで夫婦2人だけで暮らしています。」(心配になりませんか?) 「姉が近くに住んでいて、しょっちゅう会いに行きます。」(Jさん, 女性, 40代後半)

もちろん、健康ではない親も少なくない。その場合、日本にきて治療を受けたり帰国して看病したりすることは困難なので、老夫婦同士で、または近くに住む子どもが看病や介護をすることが多い。

「父は胃がよくなってしょっちゅう入院します。」「友達の誕生日会とかで酒を飲むと胃痛で一週間水も飲めなくなります。そうなる病院に入院するしかないです。最近はまだ年々なので酒を飲む回数と量が減りましたが、一昨年まではかなり大変でした。」「母は、私たちに心配かけないように、知らせてくれません。電話で話す時、父が出てくれないと、『お父さんはまた入院したの?』と聞きます。」(Dさん, 女性, 40代前半)

「父が入院した時は母が看病しましたが、手続きなどはすべて姉がやりました。今年母が入院した時は、コロナもあるし、父は目がよくないので、ずっと姉が看病しました。PCR検査してから1週間ぐらい病院で寝泊まりしながら。」(Eさん, 女性, 40代前半)

「父は糖尿病で一度歩くのも困難でしたが、この前私が2人目を出産した時は日本にきました。母は元気です。」(いまは主にお母さんがお父さんの介護をしていますか?) 「そう、特に歩けないときはね。」(Iさん, 女性, 40代前半)

今回の調査では、いざという時に頼れる人として、きょうだい以外に両親のきょうだい(おじ、おば) やいとこを挙げる人が少なくなかった。親世代は兄弟の人数が多く、住んでいる場所も近いため、頻繁に往来して絆が強い。前節で紹介した、おばたちが北京まで行って母の看病をしてくれたCさんのほかにも何人かが親族ネットワークを挙げた。

「(介護が必要になっても) たぶん老人ホームには入らないかも。母が長女なので、母の弟、妹がY市にたくさんいます。もし両親が介護が必要になったらおじ、おばと同居してもらって、我々が費用を負担しようかなと思っています。」「特におばがいいと思います。母よりだいたい若いし、母の兄弟はすごく仲がいいです。」(Dさん, 女性, 40代前半)

(義理の両親は近くに親戚などいますか?) 「います。兄弟の仲もいいので頻繁に行き来しています。義理のお父さんは7人の男だけの兄弟ですが、6番めのおじの息子がとても人よして、夫と同じ年ですが、主にそのいところが面倒を見ています。」(Iさん, 女性, 40代前半)

「私の母もおじが近く住んでいますので、なんかあるときは面倒をみてくれます。」「うちの母も若いころよく弟たちを助けました。いまはおい子、めい子たちが母を助けています。特に3番目のおじの娘は母と同じ『小区』に住んでいるので。ふだんは忙しいですが、何かあるとき、急なときに近くに人がいるのは安心ですね。この点はすごく助かります。」(Iさん, 女性, 40代前半)

しかし、このような親戚ネットワークに頼れるのはかなり恵まれた状況だという指摘もあった。

「親戚もいろんな条件をクリアしないと頼れません。退職して、時間があって、体も元気で、その子どもも反対しない。さらに面倒をみないといけない孫がないことも重要。それに、妹が泊まる場所を提供できなければならない。3人でしたから妹の家に泊まるのもちょっと…」(3人も北京に来ましたか?) 「もっといます! 北京にきたのが3人でした。」(Cさん, 女性, 40代後半)

「母は長女なのでおばたちはまだ若いですが、自分の孫の面倒をみないといけませんし、私の祖父母もいます。祖父母はおじと住んでいますが、もしおじが面倒見れなかったらおばの家に行ったりします。ですので、母の兄弟にはできるだけ迷惑をかけないようにしています。」(Eさん, 女性, 40代前半)

また、本人の例ではないが、日本で親の介護している事例も少数ながら存在する。

(ご兄弟とはよく会いますか?) 「あまり会えません。姉は義母と同居していますので。姉の義母は上の甥子が生まれた時(13年前)に来日しましたが、来て1ヵ月で脳卒中になりました。産後の世話にきたのにそうになって、そのままずっと日本にいます。」(ビザは?) 「子どもが義理の兄しかいないので特別ビザをもらって日本にいます。」(いまは自宅ですか? 施設ですか?) 「自宅です。一人でトイレぐらいは行けますが、外出はできません。施設に送ろうとしても言葉が通じないし、お金もすごくかかるし…」(じゃ、お姉さんは働けないですね。)(働いています。家の近くで。共働きですし、暮らしが大変です。)(Fさん, 女性, 40代前半)

4 将来への計画と備え

中高年になると親の老後だけでなく自分の老後も徐々に身近になる。子どもが大きくなったあと、あるいは退職したあと、移民一世たちはどこで、どのように暮らそうと思っているのか。老後に備えて何か準備をしているだろうか。

4-1 将来計画

まず、老後はどこで暮らしたいのか、あるいは暮らす可能性が高いのかについて見てみよう。

(退職後は中国に帰る可能性はありますか?) 「ありません。」「両方とも両親はいないです。故郷に帰るとしたら季節的に帰るぐらいで、帰国するという考えではないです。」(Aさん, 男性, 50代後半)

(老後生活について何か計画がありますか?) 「そうですね…日本で暮らすことは間違いありません。」「夫(日本人)は退職したら山もあって湖もあるところに小さな別荘を買って暮らしたいそうです。年取ったら育児負担がないので一緒じゃなく、別々に暮らしてもいいよと言ってます。一緒に住みたければ一緒に住んで。それを聞いて寂しかったけど、よく考えてみたら、私もそれがいいかも。(笑)」(Cさん, 女性, 40代後半)

(将来的に、子どもたちが大きくなったあと、中国に帰る可能性はあると思いますか?) 「ありますね。妻はずっと中国で『養老』したいと言っています。私は日本か第三国がいいかなど。私も中国での養老の可能性を排除はしてないです。その時になってみないと分かりません。我々が高齢者になった時は親もいないと思うので、自分がいる場所は『家』だと思います。妻は親がいることを前提に考えて、そこまで遠いことは考えてないかも。妻も(中国に)姉がいます、姉がいるところに行きたいようです。」(Bさん, 男性, 40代前半)

(息子が大きくなった後、退職した後、何か計画ありますか?) 「うむ…大きな計画はないですが、定年退職後は二拠点生活がしたいです。日本に半年、中国に半年とか。旅行はすると思います。我々が年取った時は友達も年を取ってますから、世界各地の友達を訪ねたりするのが良いと思います。」(Jさん, 女性, 40代後半)

このように、両親がすでに亡くなったり比較的年齢が高い人は老後も日本で暮らす可能性が高いと考えている。一方で、比較的年齢が若い人はいつか中国に帰って暮らしたいと思う人が少なくない。まだ30代のGさんはいつか今の会社(日系IT大手)を辞めて中国でのんびり暮らすことを夢見ている。

(日本の大企業は長く勤めれば勤めるほど得になるので、途中で辞めるともったいないと思いませんか?) 「そうは思いません。その時もし中国に帰るとしたら会社勤めではなく、

農業とかやりたいなあと。」「テレビで『ポツーンと一軒家』という番組をよく観ます。そういう生活にあこがれています。50歳になって子どもも大きくなったら、自分は金銭面ではあまり欲がないので…」「妻も私がこういう考えを持っていることを知っています。賛成するかどうか分かりませんが。(笑)10年、20年後どうなるか分かりませんし、彼女も私がいますぐ動けないことを知っているの、あまり気にしてないかも。」(Gさん、男性、30代後半)

息子をインターナショナル・スクールに通わせているDさんは将来、母国または第三国で暮らす可能性があるという。

(息子をアメリカに行かせると、そこで結婚したり、向こうで暮らすかもしれないですね。)」(「そしたら私も付いていきます。あまり遠く離れないで、車で1~2時間の距離で。(笑)」(「元々息子がアメリカに留学に行くときに私も一緒にいこうと思ってました。(6年後の)48歳に引退するのが目標でした。」「心理学の勉強もしてみたいし、英語も続けて学びたいし。」「(いまもいつ日本を離れるか分からないという気持ちですか?)」「ええ、私はそうです。4人の両親に何が起きるか分かりませんし。みんな亡くなったらどこかに定住するかもしれません。その時になるとたぶん息子も大学卒業してどこかに定着する時期だと思えます。その時までは今の状態が続くかも…」(Dさん、女性、40代前半)

4-2 老後への備え

次は老後の準備についてである。移民一世は移住先の国の同年代、同階層の人たちに比べ親族など社会的ネットワークや受け継げる資産が相対的に少ない。少子高齢化と人口減少の日本では老後に不安を抱える人が多いが、移民たちは何か備えをしているだろうか。

「老後に対する心配は、私より家内がしています。結構心配しています。中国で保険買ったり、不動産買ったりしました。それが老後対策の1つ。最近もなんかやっているようですが、私よく知らないです。(笑)」(Aさん、男性、50代後半)

「周りの40代の日本人も年金はあまり期待できない、年金は『幻』と言ってます。日本人さえ期待しないので、我々もあまり期待しません。中国人は老後に年金に頼ろうと思わないですよ。私の母も後になって年金をもらえるようになりましたが、その前は年金がなかった。親の代がこうだから、年金に対する意識が高くない。あればいいけど、なければ仕方ないなど。私は年金とは別に生命保険に加入しています。」「投資も少しやっています。」(Bさん、男性、40代前半)

(将来のために、資産運用とかしていますか?)「妻の姉も日本にいて、義理の兄もIT業界で働いていますが、宅建の資格も持っていて不動産投資をしています。それでよく不動産

投資を勧められていますが、あまり興味がないので投資してません。妻は、自分が不動産をして、私は株にした方が良いと言ってます。」(株の投資は?)「すこしだけ。コロナでずっと家にいるので株を見る時間が多くなりました。最近やる人が多いので、少し怖い気がします。」(Gさん, 男性, 30代後半)

一方で、こうした資産運用にあまり積極的でない人もいた。

(老後の準備は?)「何もやってないです。」「勤め先が上場企業なので、会社の株を買いました。それもつい最近。(笑) 自社株を買うと会社から補助がでます。もちろん上限はあります。企業型年金もありますが、儲かるのか損するのかよく分かりません。」(Hさん, 女性, 40代前半)

「老後生活はよく分からないけど、まず経済的に余裕がないといけませんね。」(自分で何か準備をしていますか?)「え〜と、私はボーっとして、実はあまりよく分かりません。」(Cさん, 女性, 40代後半)

5 社会生活と社会参加

最後に、仕事と家族以外の社会的ネットワークや社会参加についても見てみよう。仕事と家庭生活以外の趣味の友人、同郷組織、同窓会、PTAなどのかかわりは移民の社会統合を考えるうえで重要な側面である。

(プライベートではどういう人と付き合うことが多いですか?)「以前は自分の関係ですね。学生時代の友達とか、仕事関連で知り合った中国人とか。子どもができてからは子どもを通じた関係が増えています。」「子どもの同じクラスで同じ中国人なのに会ったことないので、一回イベントやりましょうとBBQを企画しました。うちを入れて5つの家族が集まりました。会ってみると経歴も似ているし、年齢も近いし、話題は子どもがメインですが、その他のプライベートなこともありました。」(Bさん, 男性, 40代前半)

(週末とか休みの日はどういう人たちに会いますか?)「大学院の時の友人が多いです。大学院の時の何人かとはすごく仲がいいです。」(中国人ですか?)「中国人です。日本人とはあまり付き合いがないです。」(会社の同期との付き合いは?)「初めの2, 3年の時はしょっちゅう参加しましたが、だんだん参加しなくなりました。あまり面白くないです。やはり文化的な差異はあって、共通の話題が少ないです。」(G, 男性, 30代後半)

「以前はほとんど日本人の友だちしかいませんでした。」「学生の時は学校の友だち、その後は会社関連の友だち。アルバイトの時の友だちもまだ付き合いがあります。そう考えると、私は日本にきて日本人からいろいろ助けてもらいました。」(同郷出身者の集まりやサークルなどには良く参加しますか?)「そういうのはあまりないですね… 大学1, 2年生の時は、

彼氏を見つけようとよく顔を出しましたが、2年後半ぐらいからあまり参加しませんでした。最近では参加しようとしても『線』が切れて…」(H, 女性, 40代前半)

(日本人のママたちとはうまく付き合ってますか?) 「他の中国人ママたちと比べると、うまくやっている方だと思います…深い付き合いはしませんが、まあまあ和気あいあいに付き合っています。けっこう助けてもらっています。(仕事のときに) 下の子の面倒を見てくれるのも日本人のママ友です。」(C, 女性, 40代後半)

地域の国際交流サークルで活動したり、専門性を活かして市民活動をしたりする人もいた。「週末は中国人との付き合いが多いですが、ふだんは日本人との付き合いが多いです。日中文化交流のサークルがあって、私はそのメンバーです。定期的にいろいろなイベントをやったり新聞を発行したりします。他に、『○○会』という中国語を学ぶグループがあって、1カ月に1回活動します。勉強というより交流がメインです。」(なぜこのような活動をしていますか?) 「最初のきっかけはお隣さん、日本人ですが、彼がこのサークルを作ったんです。」「地域の新聞に息子の作文を投稿したのがきっかけで、その編集長が私の名前を見てもっと大きなサークルに紹介してくれました。その会長がさらにいろんな団体に私を紹介しました。」(ママ友との付き合いは?) 「私はどこのカフェがいいとか、そういう話題はあまり好きじゃないです。」(Jさん, 女性, 40代後半)

(仕事以外で趣味とかでネットワークなどありますか?) 「1つは、今年辞めましたが、日本○○協会というところで幹事をしました。」「今は、他の○○協会で副会長をやっていて、日中韓で環境問題に関するプロジェクトをやっています。」(この仕事はボランティアですか?) 「そうです。両方ともボランティアです。」「日本社会にも結構お世話になりましたから、日本社会で必要とされたら、キャリアを通じてネットワークはありますから、手伝いたいです。」(Aさん, 男性, 50代後半)

在日中国人の中では比較的珍しいケースであるが、Iさん夫婦は20年近く教会に通っている。

「研究生の時に友達に誘われて華人の教会に行きました。N大学の近くにありました。ちょうど2003年でSARSが流行った時期でけっこう恐ろしかったし、東海地方ではいつ東海大地震が起きるか分からないし、『進退両難』の感じ。自分の進路もまだはっきり決まなくて、なんか心細かった。教会にいったらすごく落ち着いて、癒されました。」(いまはどこの教会に通っていますか?) 「恵比寿にある東京国際基督教会。そこは最大の華人教会です。」(毎週そこまで通っていますか?) 「若いときはすごくバリバリで、上の子を連れながら私が運転して通いました。いまはオンラインです。対面も再開しましたが、下の子が小さいので…」(Iさん, 女性, 40代前半)

また、AさんとDさんは在日の同郷・同窓団体の中心メンバーで、そのコミュニティを束ねる役割を担っている。

(仕事以外のネットワークは?) 「主に(中国の学部時代の)Y大学学友会ですかね。」(よく参加しますか?) 「ええ、20年近く参加しています。2018年から副会長をやっています。サッカー、バレーボールなどいろんなチームがあってイベントも多かったですが、去年はコロナで全部ストップしました。」 「他に、同じ故郷の友達があります。高校、中学、なかには小学校の同級生もいます。」(Dさん、女性、40代前半)

(将来やりたいことは?) 「日本にいる同郷、同民族の出身者100人のインタビューをしてみたいと思います。タイトルは『縁』、日本語で本を出したいと思っています。」 「私は小説を読まない、書かないです。事実だけを淡々と並べて、10年、100年後の後に1つ残したいというのが私の夢です。結構大きな夢です。(笑)」(Aさん、男性、50代後半)

6 考察

以上、1990年代以降に来日した留学定住移民へのインタビュー内容のうち、在留資格または帰化の選択、様々なライフリスクの経験と対応、将来計画、そして社会生活について整理した。当事者たちの叙述から日本に住む留学定住移民の生活の実態や意識の特徴(の一部)が明らかになった。

在留資格と定住理由

まず、移民生活の重要な節目である永住権または国籍の取得に関して、中国出身者に限って言えば、帰化よりも永住権を選択する人が多いことが公式統計からもインタビューからも確認された。永住権を選ぶ理由として、自分が育った国に対する思い(中国語で「情結」)、親がまだ中国にいること、日本国籍だといざという時に中国で滞在することが不便であること、日本での暮らしに特に不便がないことなどが挙げられた。一方、帰化を選択した人たちは仕事上の便宜やその他のやむを得ない理由のために帰化を選択したことを強調した。在留資格や国籍に関して興味深かったのは、1つの家族のなかでも国籍や在留資格が異なるケースがかなり多かったことである(A, C, D, G, Jさんの例)。日本人の配偶者でも長年帰化しないまま中国国籍を保有しつづけたり、中国出身者でもわざと夫婦それぞれ日本国籍と中国国籍にしたり、親の滞日の便宜のために永住よりも高度人材のビザを選択したりするなど、戦略的な行動が多く見られた。また、帰国せず日本に残った(または戻った)理由として、変化と競争が激しい中国よりは日本の方が自分たちのような「普通の人」=中産層が安心して暮らせるからと述べた人が多かった。

「日本は結構良いところですよ。ふつうの人の幸福度の角度から考えると悪くない国だと

思います。」(Cさん, 女性, 40代後半)

「普通に、静かに暮らすには日本がいいと思いました。」(Hさん, 女性, 40代前半)

同じような証言は在日中国人社会を精力的に取材してきた中島のルポルタージュ(中島2018)にも度々登場する。

育児, 親のケア, 自分の老後

次に, 人生の比較的早い段階で経験する出産・育児に関しては, 親たちが日本に来て手伝ったり, それが難しい場合は中国に里帰りして産後ケアをしてもらったりと, 国境を越えたケアの協力体制が機能することが確認された。中国特有の「坐月子」の文化に加え, 中国の退職年齢が比較的若いこと(特に女性は50~55歳が多い), 多くの親が50~60代で比較的元気であったこと, そして移民たちの兄弟の人数が1~3人とそれほど多くないことがこのようなトランスナショナルな育児分担を可能にしている。出産前後に実家の母に手伝ってもらうのは日本でも一般的であるが, 中国移民の場合, 出産直後だけでなくその後も数年にわたって祖父母が孫の世話にかかわっているケースが多い。なかにはDさんやEさんのように, 子どもを中国の祖父母に一定期間預けた人も少なくない³⁾。

しかし, 頼りにしていた親がだんだん年を取り, 病気になったりケアが必要になった時, 移民たちが直接ケアを提供することは非常に難しい。既婚者であれば自分がケアすべき子どもがいて, 独身者であれば仕事をしなければならない。そのため, 中国にいる親のケアは他の兄弟に任せる(C, E, H, J)か, おじ, おば, いとこなど拡大家族に助けてもらう(C, D, I)しかない。本人が一人っ子, または兄弟が全員日本にいる場合は, 親が「老々介護」または「独居老人」となる可能性が高い。もちろん, 老々介護や独居老人は日本の方が中国より多く, 他の国に移住した留学定住移民(特にアメリカが圧倒的に多い)も同じような問題を抱えている人が多い。日本の特徴として, 一人っ子など特別な事情がある人や高度人材を除き, 親を日本に呼び一緒に暮らすことが在留資格上きわめて難しいことが挙げられる(家族滞在ビザの対象は配偶者と子どもに限定される)。また, 日本には世代間扶養の性格の強い医療保険, 介護保険の制度が整備され, 現役の移民たちもその保険料を負担しているが, (同世代の日本人に比べ)移民たちの親の医療や介護は私的に解決しなければならない。両親に定期的に仕送りをするなど経済的に扶養しているHさんは次のように述べた。

「いま一番心配なのはやはり両親です…長期間日本に滞在するのは難しいかもしれませんが, 正直, 医療保険には入れたいです。健康なときはいいですが, あとで何かあった場合はね。一年のうち半分は日本にいて, 半分は中国にいたりとか。手続きさえできればいいですが…」(Hさん, 女性, 40代前半)

今回のインフォーマントたちは1970年代生まれが多く一人っ子は1人だけだったが, 今後, 1980年代以降生まれの一人っ子世代の親たちが続々後期高齢者になる時には, 多くの

移民たちが深刻な「介護の危機」に直面することが予想される。寶・佐藤（2017）によると、帰国を予定している元留学生の主な理由の1つが親の介護である。留学生を人口減少が進む日本を支える貴重な人材、労働力として活用したいなら、特に中国留学生の場合、老親のケアの問題も視野に入れて考えなければならないことを示唆している。

続けて、移民たち自身の老後や病気などのリスクに関して、今回の調査対象である留学定住移民は全体的に学歴が高く、本人または配偶者が正規労働者として日本の内部労働市場に包摂されている人が多かったため、特別な困難は確認できなかった。今回調査した10名は全員、本人または配偶者の勤め先の厚生年金、健康保険に加入し、加えて、大企業の場合は団体生命保険や企業年金、自社株など企業の福利厚生を受けていた。同年代の日本人と比較すると、日本語学校や大学院に通った年数の分だけ公的年金への加入年数が若干短いという問題以外は、全体的に雇用や老後の生活費、医療費などに対する不安が特に強くはなかった。この点は外部労働市場に止まることの多い他のエスニック移民グループとの顕著な違いであろう。また、若い時に海外に渡り、ゼロから人生を切り開いてきた移民一世の普遍的な特徴として、「自分でなんとかする」というメンタリティが強い。日本国籍であるが選挙に行ったことがないというFさんの次のような言葉が象徴的である。

「投票に行ったことはないです。自分とは関係ないかなと思って。自分のことは自分で頑張らないと。」（Fさん、女性、40代前半）

帰属意識と社会参加

仕事と家族以外の社会生活、日本人との付き合い、日本社会に対する帰属意識に関しては個人による違いが大きく、学歴や雇用形態、日本語能力による明確な違いが観察されなかった。近年におけるSNSの発展や在日中国人コミュニティの成熟にとともに、以前に比べ海外生活による孤独感や不便は大幅に減り、同窓会、同郷会、趣味のサークルなど社会生活が多様化、充実化している様子が伺える。

その一方で、地域や学校のPTAなど日本固有のコミュニティや団体とのつながりは薄く、帰化した人も含めて日本社会への帰属意識、市民意識は全般的に弱い（ある程度の愛着はある）。日本の大学、大学院を出て大企業で働いていても、あるいは永住権を取得したり日本国籍に帰化しても、「自分は外国人」である意識を持っている人が多い（中島2018、坪谷2008）。移民の社会統合に関する全国調査からも経済的要因と日本に対する帰属意識はほぼ関わりがないこと、教育年数はむしろ有意な負の関連があることが発見されている（五十嵐2021）。

帰属意識は本研究のメインテーマではないのでここでは深く立ち入らないが、留学定住移民を含めて在日外国人の帰属意識や市民意識が弱い原因として受け入れ側の日本社会の原因と、それを受けての移民側の原因の両方を指摘することができる。日本側の問題点は、永吉

「留学定住移民」の定住過程、ライフリスクと社会統合 (2)

の言葉を借りれば、「日本の諸制度は、そこに暮らす市民の意識も含め、日本に定住し、ともに社会を作る構成員としての『移民』の受け入れを前提として」おらず、「移民を一時的な滞在者としてしか扱わない制度が、移民自身の定住志向を低下させ、統合をさらに困難にしていくという悪循環に陥っている」(永吉 2021: 246-7)。一方、移民側の問題点については、長年ジャーナリストとして日本社会と深く付き合ってきた A さんが次のように鋭く指摘した。

「私たちが日本社会のなかに溶け込んで、この社会のために何か貢献しようとする意識が薄いと思います。」「今回のコロナもそうですが、私が日本社会にどんな貢献ができるのかを考える外国人は少ない。あらゆる手段を使ってできるだけ日本から何かをもらおうとする。」(A さん, 男性, 50 代後半)

移民を受け入れる社会の制度、政策、人々の態度と移民の帰属意識は合わせ鏡のような関係である。今後も増えつづけるであろう定住移民を「彼ら」(They)として他者化し、社会の分断要素にしないためには、定住した移民を「われわれ」(We, Us)の一部であることを公的に認め、社会統合を促進するための努力と投資をする必要がある。

おわりに

1983 年の「留学生 10 万人受入計画」から約 40 年、出入国在留管理の「1990 年体制」から約 30 年が経ち、日本は欧米ほどではないが、着実に「移民社会」に向かっている。政府による積極的な定住支援や社会統合政策がないにもかかわらず、すでに 120 万人以上の移民が永住権を取得したり日本国籍に帰化し、日本社会の構成員としてここで働き、暮らしている。前稿(李 2022)および本稿では、日本に定住した移民のなかで「留学定住移民」というグループに焦点を当て、首都圏に住む在日中国人を中心に、留学から定住に至る経緯、出産・育児や親の介護などのライフリスク、将来計画、および社会生活について考察した。

インタビュー調査からは、中国出身の留学定住移民は高い学歴と日本語能力を武器に、また中国の目覚ましい経済発展による様々なチャンスを生かしつつ、経済的および社会的側面において比較的高次元の社会的統合を実現していることが分かった。今回の調査では今まで移民研究でほとんど注目されなかった出産や病気、親の介護などのライフリスクに重点をおいたが、出産・育児に関してはトランスナショナルなケアの協力体制が比較的順調に機能しているが(COVID-19によって一時的に機能しづらくなった)、老親の病気、介護に関しては移民本人が協力することが難しく、母国にいる兄弟や親族ネットワークに頼らざるを得ないことが発見された。また、正規雇用の移民たちは日本の社会保障、企業福祉に包摂されているが、現行の在留資格管理体制のもとでは社会保障制度の世代間扶養の恩恵は受けにくいことが分かった。

このインタビュー調査は「移民と社会保障」に関するより包括的な研究の第一歩として企画、実施されたものである。インタビュー対象を選ぶ際にできるだけ多様性を確保するよう努めたが、無作為に抽出されたわけではないため年齢や学歴、出身地域などに一定の偏りが生じることは避けられなかった。しかしその代わりに、筆者も当事者の一人として、それぞれのインフォーマントのライフストーリーに共感しながら深い対話ができ、アンケートだけでは得られない貴重な「生の声」を聞くことができた。本稿では、それらの「声」に多くの紙幅を割いたため、理論的な検討、分析は十分でできなかった。今後、今回の調査から得られた知見を踏まえつつ、さらに留学定住移民以外の移民グループの実態も加えて、「移民と社会保障」に関する理論的な追究を進めていきたい。

注

- 1) 日本人の配偶者や子ども、高度人材等には期間短縮措置がある。
- 2) ここでの親は、既婚者の場合、義理の両親を含む。
- 3) 在日中国人家族の育児援助システムや子どもの教育に関しては、社会学、教育学を中心に多くの先行研究がある。主なものとして鄭 (2006)、坪谷 (2008)、Liu-Farrer (2011)、中国出身者のうち朝鮮族にフォーカスしたものとして趙 (2016)、宮島 (2017) などを挙げるができる。

参 考 文 献

〈日本語〉

- 五十嵐彰 (2021) 「移民の日本に対する帰属意識—水準と規定要因」永吉希久子編『日本の移民統合—全国調査から見る現況と障壁』明石書店
- 奥貫紀文 (2019) 「社会保障—外国人性悪説を超えて」高谷幸編『移民政策とは何か—日本の現実から考える』人文書院
- 是川夕 (2019a) 『移民受け入れと社会的統合のリアリティ』勁草書房
- 是川夕 (2019b) 「教育を通じた移住過程における移民の社会的統合—元留学生の社会意識に注目した分析」成蹊大学アジア太平洋研究センター『アジア太平洋研究』No. 44, pp. 61-82
- 趙貴花 (2016) 『移動する人びとの教育と言語—中国朝鮮族に関するエスノグラフィー』三元社
- 坪谷美欧子 (2008) 『「永続的ソジョナー」中国人のアイデンティティ—中国からの日本留学にみる国際移民システム』有信堂
- 鄭 楊 (2006) 「在日中国人家庭における『家族・親族の共同育児』の変容 : 育児援助の事例研究から」大阪市立大学『教育学論集』32 : 23-34
- 竇碩華, 佐藤由利子 (2017) 「中国人元日本留学生の進路選択の影響要因と職場環境・生活環境に関する研究—理工系と文系の比較, 主な職場別の分析から」『移民政策研究』9 : 89-105
- 中島恵 (2018) 『日本の「中国人」社会』日本経済新聞出版社
- 永吉希久子 (2020) 『移民と日本社会—データから読み解く実態と将来像』中央公論社
- 永吉希久子編 (2021) 『日本の移民統合—全国調査から見る現況と障壁』明石書店

「留学定住移民」の定住過程, ライフリスクと社会統合 (2)

馬文甜 (2016) 「現代日本における中国出身留学生の将来設計に関する一考察」『移民政策研究』
8 : 71-88

宮崎理枝 (2016) 「フリーライディングする福祉制度？」後藤玲子編『正義』(福祉 + a) ミネルヴァ書房

宮島美花 (2017) 『中国朝鮮族のトランスナショナルな移動と生活』国際書院

李蓮花 (2021) 「移民と社会保障をめぐる近年の制度変化—進む定住化と社会統合政策の必要性」
『週刊社会保障』3125 : 48-53

李蓮花 (2022) 「『留学定住移民』の定住過程, ライフリスクと社会統合 (1) —中国出身移民へのインタビュー調査から」東京経済大学『東京経大会誌 (経済学)』315 :

〈英語〉

Liu-Farrer, Gracia (2011), *Labor Migration from China to Japan: International Students, Transnational Migrants*, Routledge

Liu-Farrer, Gracia (2020), *Immigrant Japan: Mobility and Belonging in an Ethno-nationalist Society*, Ithaca: Cornell University Press

Sainsbury, Diane (2012), *Welfare States and Immigrant Rights: The Politics of Inclusion and Exclusion*, Oxford University Press